

国際的総合評価委員会の組織・運営を しました。

J STでは5年に1度、国内外の有識者を招へいして、戦略的創造研究推進事業制度の「国際的総合評価委員会」を開いています。この委員会では、戦略的創造研究推進事業の全体プログラムが評価されます。結果は外部に公表し、JSTの次期中期計画の策定にも反映します。プログラムの改善などにも活用される、大変重要な評価会です。

私たち基礎研究制度評価タスクフォースは、同委員会の事務局の役割も担い、評価の設計、資料の作成や会議の組織・運営、さらに評価結果の取りまとめや発表まで、一連の業務を担当しています。

組織・運営の業務の1つが、評価委員への事前説明です。とくに海外の委員は、必ずしも本事業を詳しく把握しているとは限りません。評価委員に、本事業の仕組みや成果に加え、JSTという組織そのものについても理解してもらうことで、初めて正しい評価プロセスが実現します。当日の会議だけではなく、定量的なデータや定性的な検証結果にもとづいた一連の議論、個々の分析を統合したものが研究評価であると、私たちは考えています。

昨年夏から、評価会の屋台骨となる評価資料を作成しはじめました。海外委員も用いるこの資料では、社内や日本国内だけで通用する言葉を極力排



基礎研究制度評価タスクフォース
副調査役

吉田秀紀 (43) よしだ・ひでき

●業務の内容

戦略的創造研究推進事業プログラム評価の枠組み設計や、評価委員会の組織・運営を行う。国際的総合評価のほか、研究領域のマネジメントやプログラム終了後の成果の、科学技術としての進展や社会経済への波及効果の追跡評価も行っている。

●Background

東京大学大学院工学系研究科博士前期課程修了。電機メーカーで研究開発に8年間従事後、JST入社。博士(政策研究)。サセックス大学SPRU客員研究員、スタンフォード大学客員研究員などを経て現職。現在9年目。

除し、一般的な用語や表現で、本事業の独自性を訴えなければなりません。海外の他機関のホームページや文献なども参考にして、英文の資料を作り上げました。その際、公募された提案のなかで革新的な研究者を見いだす「目利き」という機能をどう表現するか議論を重ねましたが、「MEKIKI」で通すことになりました。

委員への事前説明では、私はヨーロッパを担当し、昨年12月に、約1週間で3カ国をまわりました。まず私から事業の趣旨や仕組み、概観について説明しました。研究成果についても、科学的な価値だけでなく、社会や経済への波及、たとえば公的な応用研究プロジェクト、産学連携、ベンチャー事業化などの実例をあげて説明しました。委員とのディスカッションでは、世界的に有名な専門家と濃密なコミュニケーションができて、大変難しい経験となりました。

このような事前準備を経て、本番の「第2回国際的総合評価委員会」が2月17日から19日まで東京で開かれました。評価委員の方々からは、さまざまな意見が提示され、「目利き」の存在や、研究活動をきめ細かく支援する体制などが高く評価されました。評価結果はホームページ(<http://www.jst.go.jp/kisoken/kokusai.html>)でも9月頃公開の予定です。



左:事前説明で訪問したスウェーデンのルンド大学。中:評価委員会では、研究者へのサイトビジットも行った。右:澤岡昭委員長(大同大学学長)ほか、国内6名、海外6名の有識者がメンバーの評価委員会。

TEXT:Office彩蔵